

2021年度活動概要

最新言語理論に基づく応用英語文法研究会

最新言語理論に基づく応用英語文法研究会は、言語研究・言語理論の英語教育へ応用をテーマに、機能主義言語学研究会との合同研究例会（Zoomによる開催）を中心に活動した。大学レベルの英語教育で扱う言語現象に関して、本研究会会員の今井隆夫は認知言語学の視点から、長峯貴幸は ELF 音声学の視点から、北尾泰幸は生成文法理論の視点から、都築雅子と高橋直子は語彙意味論とコーパス言語学の視点から、奉鉦京は第二言語習得論の視点から、そして大森裕實は歴史言語学と機能主義言語学の視点から新たな切り口を攻究した。

特に、令和3年度(2021年度)は、第60回国際大会《JECET HOUR》において、「21世紀 ELF 時代の多様性に対応する言語知識」(Linguistic Knowledge Applied to Diversity in the ELF Era of the 21st Century) というテーマで研究発表を行なった——本発表では、発表者間の質疑応答形式を採りながら、ELF 時代の英語教育に適応できる言語知識とは何かについて考究した。第1部では、長峯と大森の言語的談話を通して「英語音の多様性と習得モデル」について考察を行なった。大森は伝統科学文法及び伝統的音声学音韻論の観点から、従来型の英米語標準モデル(修正 RP/修正 GA)の習得で ELF 時代の様々な英語音声にも十分に対応できると考えるが、他方、長峯は英語非母語話者音声の聴解及びその指導法に関して、さらなる検討が必要であると主張した。新学習指導要領や大学入試共通テスト問題作成方針で示されたように、「現代の多様な発音」に対応できる学習者の育成が求められている現状に鑑みて、それに対応できる音声学習のあり方を追求する。第2部では、今井と大森の言語的談話を通して「多義語と多義性」について考察を行なった。大森は歴史言語学及び英語史的観点から、たとえ形が同一であっても、語源の異なる単語は意味のネットワークとして繋がることはなく、個々の語彙として心的辞書に記憶されるはずであると考えているが、他方、今井は従来の英語教育で行なわれてきた多義語の学習方法(=多義語の意味は、無関連なものとして、それぞれに訳語を与え、暗記するアプローチ)では効果的ではないと主張した。すなわち、「形が同じなら意味に類似性や関連性がある」という認知言語学の考え方を参照することで、多義語の学習が有機的に行なえることについて提案した。また、認知言語学的には「多義」は語のレベルだけでなく、過去形などの文法要素や、構文にも言える文法的特性であり、それらの多義性についても具体的事例を挙げての説明があった。

本研究会は第53回国際大会(2014)から第58回国際大会(2019)まで連続してシンポジウムを実施し、多くの方々と意見交換する機会を設けて、活動の環を広げてきました。今後も継続して研究テーマを攻究していきたいと考えています。